

人形物語 さまざま

矢川澄子

さらってきて海辺の漁師小屋にあずける。王女はここでばら色の頬を取戻し、のびのびと育ち、やがて年頃になって漁師の息子と恋しあうようになる。

一方宮廷人たちは仙女から事の真相を知らされても、自然児に還った王女をついに受容られず、そのまま替玉の人形に仕えつづける、ということでの話は終っている。いかにもヴィクトリア朝人の思いつきらしい皮肉な筋立ての一篇である。

*

人形と人間とはどこがどうちがうのだろう。わたしの好きなメルヘンやファンタジーから思いつくままにいくつかの例をあげてみよう。

まずイギリス十九世紀のメアリ・ド・モーガンに『おもちゃの王女様』という童話がある。

むかしひとりの王女があった。そこはまことにお上品な宮廷で、あらゆる人間的な感情の素直な表白は失礼とみなされ、他国

生れの王妃などはその息苦しさにとうとう

病気になって死んでしまったほどだ。王妃

の代母にあたる仙女は、のこされた幼い王

女が日に日に生氣を失ってゆくさまを見る

にしのびず、魔法使にたのんで王女そっくり

りの年恰好の精巧な自動人形をつくらせ

る。なにしろこの宮廷で子供が口にすること

とはは、はい、いいえ、どうぞぐらいで、

あとはすべて機械的動作で事足りるのだ。

この人形を替玉に、仙女はひそかに王女を

人形と人間との役割交換をさらに奇抜なかたちで童話に仕立てたものに、リチャード・ヒューズの『ガートルードとその子』がある。

木製人形のガートルードは、持主の子供があんまり手荒なのに腹をたてて家出して、森の中をさまよううちに、ふしぎな老人に出会って「子供屋」につれてゆかれ

る。そこはまるでお人形みたいに子供をならべて売っていて、人形たちがよりどり見どりで買っただけなのだ。ガートルードもそこで自分の気に入った女の子を買ってきてい

っしょに暮らしはじめ、髪の毛を切ったり、水風呂で風邪をひかせたり、かつて自分が打けたとおなじような仕打をその子に

報いる。でもそのうち人形たちのひらいたお茶会で、つれてこられた子供たちが犬に

おそわれ、ガートルードは危険をおかしてわが子を救いだす。ここではじめて人形と

女の子とは仲よく抱擁しあい、女の子はガートルードの木の腕を人間みたいにあなた

かいと思ひ、またガートルードは女の子の腕を木のようにたのもしいと思ったとい

*

『人形の家』といっても、これはノラの話ではない。ルーマー・ゴッデンの方だ。現

存のファンタジー作家で最も味わいのある人形物を書いているのはやはりこのひとであらう。

ゴッデンの人形たちはみな魂をもちながら木石の身をもてあましている。いわば物

いわぬ人たち、肢体不自由児なのだ。人形たちにとって人間は神さまだ。神さ

まがねがいなききとどけてくださらないかぎり、自分ひとりでは何もできないのだから。何かしたいと思ったときには人形たち

はおねがいをする。無言で、懸命で、木の体、ガラスの体がみしみしいってびびわれ

そうになるまでねがうのである。このねがいがどこまで通じるだろうか。死ぬも生きるも、すべては持主である子供たちの心ひとつなのだ。

*

ほとけ作って魂入れず、などという。仏像も人形もその意味ではおなじであらう。

いまではすたれてしまった風景だけけど、そういえばむかしよくお人形代りに座蒲団を二つ折りにしておんぶした女の子を見かけたものだった。

女の子の人形あそびをばかにしてはいけない。二つ折の座蒲団にまで感情移入して母心をふりまけるなんて、とてもすばらしいことではなからうか。

人間には自分より大きなものにあこがれ、惹かれる気持と同時に、自分より小さなものを願ひ、いとおしむ気持がはじめから具わっているはずである。とりわけやがて母となり、小さな生命をはぐくむはずの女の子にその傾向がつよいのは当然である。そのあたりのことをよく見きわめたる上で、わたしもいつかわたしなりの『人形の家』物語を書けたら、などと思ってい